

2021年5月20日作成

基礎情報学研究会・IS技術者のためのPsytech2020研究会 合同研究会

テーマ：「IS技術者がイキイキと働く、身と心をつなぐうつわ ー内受容感覚の気づき」

日時：2021年7月3日（土）15時00分～16時30分

講師：濱野 清志氏（京都文教大学 臨床心理学部臨床心理学科 教授）

場所：オンライン（zoomを使用） ※前日に招待メールを送付致します（7月2日見込み）

参加費：不要

申込方法：参加ご希望の方は、以下の申し込みフォームからお申込みください。（〆切：7月1日）

<https://forms.gle/sS5msrLNt6Yq9qhJA>

コロナ禍において感染防止を目的としたテレワークの普及が大都市を中心に進み、働く環境や人々の意識は劇的に変化しました。在宅でオンライン会議をすることが習慣化する中、便利さを実感すると同時に対人関係や自らのあり方について違和感を覚える人は少なくないでしょう。身と心の専門家である濱野先生は次のような問いを投げかけ、身体の内部に関する感覚である「内受容感覚」の気づきについて「うつわ」ということばを用い興味深い論文*1)を発表しておられます。

「高度情報化社会におけるアイデンティティの変容は、それが関係に応じて部分化する傾向を強くもっている分、記号化し、部分化した私を、私という生きた感覚の一部として1つに抱える『うつわ』を形作り、育てることが求められるようになる。」

IS技術者についても、テレワークを始めとする多様な働き方へのシフトが加速する一方、とりまく環境は未だ伝統的な工業社会をベースにした意識が根強くあります。IS技術者としてのアイデンティティのあり方、つまり「うつわ」を育てることについては困難が想定されます。「内受容感覚」に意識を向けることにより、IS技術者がアイデンティティを高めることができる可能性があります。そして、自律性の確保や発想力の向上や創造力の活性化、問題解決のレベルアップが期待できます。このことは、当学会が明示する「プロジェクト・メンタル・プロセス」*2)にとって重要な鍵となる可能性があります。そこで「内受容感覚」から捉え、解決法となりえることについて検討します。

「内受容感覚」については、近年心身医学の分野などにおいて、脳機能画像研究の発展とともに注目を集める研究分野の1つとなっています。今回、濱野先生をお招きし、「内受容感覚」についての講義、そして気功のワークをしていただきます。ワークでは、まず「内受容感覚」に意識を向けること、そしてそれに働きかけて心身の全体を整えることを目指します。基礎情報学*3)によれば、「大半の生命情報は、観察／記述されず、社会情報に転化しないままとどまって」いると考えられます。自分の内面に注意を向けることは、「原一情報が社会情報に転換」され、自分という存在を大切にすること＝ウェル・ビーイングへとつながります。

プロジェクトにおけるメンタル面のケア等を日頃担当されている管理者やリーダーなど、専門的に心理療法を学んだ経験がない方を対象とした入門レベルの内容です。IS技術者のやりがい醸成に関心のある方の多数のご参加をお待ちしています。

問合せ：IS技術者のためのPsytech2020研究会 主査 三村和子 (e-mail:kzkmimura@gmail.com)

基礎情報学研究会

椋本 輔、西田 洋平 (info@digital-narcis.org)

※■は@に置き換えてください。

<次ページへ続く>

*1) 濱野清志先生の以下の論文を参考にしてください。

濱野清志, “高度情報化社会におけるアイデンティティの変容-内受容感覚への注目”, 心身医学, Vol.61-2, 2021, pp. 158-163.

*2)プロジェクト・メンタル・プロセス」

従来より明示されている「プロジェクトマネジメント・プロセス」および「ソフトウェア・エンジニアリング・プロセス」に加えて、第3のプロセス「プロジェクト・メンタル・プロセス」が重要であると示されている。

参考文献：新情報システム学体系調査研究委員会編, 新情報システム学序説, 一般社団法人情報システム学会, 2014

*3)基礎情報学では、情報は「生命情報」、「社会情報」、「機械情報」の3種類に大別される。「あらゆる情報は生命情報であり、その中の一部が社会情報に転化する。さらに、社会情報の一部が機械情報に転化する。ここで、転化するとは、「基本的に元の性質を保ったまま新たな属性を付加されると言うてよい。」

参考文献：西垣通, 続基礎情報学：「生命的組織」のために, NTT出版, 2008

以上